

2021年12月19日 説教「聖霊によって宿された子」

マタイの福音書1章18~25節

今朝はキリストのご降誕を覚えつつ、マタイの福音書1章から学びます。

1. 聖霊によって身重に (18~19節)



①誕生の次第 (18)「イエス・キリストの誕生は次のようであった。」マタイの福音書は冒頭にアブラハムから始まるイエス・キリストの系図が記されています。アブラハムからダビデまでが14代、ダビデからバビロン移住までが14代、バビロン移住からキリストまでが14代になります。イエスの父はナザレに住んでいた大工ヨセフです。これは地上の家族の系図であって、イエスのまことの父はヨセフではないことが以下に記されます。ここから、福音書はイエス・キリストの誕生の次第を語り始めます。

②身重になったマリヤ (18)「その母マリヤやヨセフの妻と決まっていたが、ふたりがまだいっしょにならないうちに、聖霊によって身重になったことがわかった。」イエスを産むことになる女性の名前はマリヤ。彼女はおそらく10代の女性だったでしょう。ルカの福音書を見ると、彼女の信仰と人となりがかがえします。マリヤは誠実で真っ直ぐな信仰者でした。また、マリヤの賛歌(マグニフィカート)には、知性をも持っていたことがわかります。しかし、大事なことは、彼女はどこにでもいる普通の一般庶民の女性であったということです。マリヤには婚約者がいました。ところが、結婚前に彼女は身重になるという、尋常ではない事態が生じたのです。彼女は聖霊によって身ごもったのです。その経緯はルカの福音書1章に詳しいです。

③ヨセフの思い (19)「夫のヨセフは正しい人であって、彼女をさらし者にはしたくなかったので、内密に去らせようと決めた。」そのことを受けて、婚約者であったヨセフは苦悩したのです。彼は「正しい人であった」とありますが、罪を犯さない人という意味ではありません。彼が神を見上げながら、実直に生きる人であったということです。彼はマリヤを信じていましたが、普通に考えるなら、なんらかの間違ひがあつて、マリヤは子を宿すことになったと思われまふ。しかし、ヨセフはマリヤを愛していましたので、ユダヤ人社会のさらし者にはしたくなく、静かに離縁しようとしたのです。

2. 主の使いがヨセフに (20~21節)

①御告げ (20)「彼がこのことを思い巡らしていたとき、主の使いが夢に現れて言った。『ダビデの子ヨセフ。恐れないうあなたの妻マリヤを迎えなさい。その胎に宿っているものは聖霊によるのです。』」ヨセフがこの難しい事態について様々なことを考えている時に、主の使いが夢に現れたのです。「ダビデの子ヨセフよ」。その呼びかけではヨセフがダビデの子孫であることが確認されています。メッセー

ジの内容は、①恐れるな。世間々が何を言っても恐れるなど言うのです。②婚約者マリヤと結婚しなさい。人の目など気にせずになさい、ということです。③彼女に子を宿らせたのは聖霊だということ。それはマリヤにも伝えられたことでした。

②その名をイエスと (21)「マリヤは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。」御使いのみ告げは続きます。マリヤの胎の子は男の子であるということです。「ひとりのみどりごが、生まれる」(イザヤ9:6)とありますが、その預言が実現するというのです。生まれたなら、その子の名前はイエスとつけなさいということです。イエスという名は、「主は救い」という意味です。まさに、救い主である方にふさわしい名前でありました。

③罪から救う方 (21)「この方こそ、ご自分の民をその罪から救ってくださる方です。」この方が旧約聖書でメシヤ(救い主)であることが伝えられているのです。つまり、この方は「ご自分の民をその罪から救ってくださる方だ」と明言されます。人間にとっての最終的な課題は罪です。「罪の支払う報酬は死です」(ローマ6:23)とありますが、そのままでは永遠の死に向かうしかない者たちです。この方は罪の告白をする者に赦しを与えてくださるのです。十字架の死は人間の罪の罰の身代わりでした。このことを信じ、主の前に出る者は救われるのです。

3. 主の使いの言葉に従うヨセフ (22~25 節)

①預言の成就 (22)「このすべての出来事は、主が預言者を通して言われた事が成就するためであった。」イエス・キリストの誕生預言は、イザヤ書などに記されています。ヨセフとマリヤを通しておきている出来事は、すべて預言されていることでした。興味深いことに、ここには預言者によって言われたことが成就するためにも、キリスト誕生の出来事はあるのだと伝えられていることです。つまり、ここでは預言の意味の重さを語っているのです。

②インマヌエル (23)「『見よ。処女がみごもっている。そして男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。』(訳すと、神は私たちとともにおられる、という意味である。)」イザヤ書7章14節の預言の言葉には、第一に処女が身ごもること、第二にその処女は男の子を産むということ、第三にその子はインマヌエルと名づけられるということでした。ここにインマヌエルという言葉の意味が伝えられているのはどうしてでしょう。それは、インマヌエルはヘブル語ですが、マタイの福音書はギリシャ語で記されているので、ギリシャ語で読む者たちに、その意味を伝えているのです。マタイの福音書がユダヤの民に向けて書かれているので、その意味は分かっているはずではありますが、それを確かめているのです。

③命じられた通りに (24~25)「ヨセフは眠りからさめ、主の使いに命じ

られたとおりにして、その妻を迎え入れ、そして、子どもが生まれるまで彼女を知ることがなく、その子どもの名をイエスとつけた。」これらのことが伝えられた後に、ヨセフは眠りから目が覚めます。そして語られたことが、主の使いを通して、主が自分に語られたのだと確信しました。そして、その促しにしたがったのです。即ち、ヨセフは許婚者のマリヤを妻として迎え入れたのです。しかし、その子が生まれるまでは、彼女を知ることなく過ごしました。そして、その子が生まれると、言われた通りに、その子の名前をイエスと名づけたのです。《結論》今朝の聖書の章節には、処女降誕の出来事が記されています。つまり、マリヤは聖霊によって身ごもり、マリヤの胎で成長した子が誕生するという出来事です。このことを現実として受け止めていったマリヤの信仰についてはルカの福音書1章に記されています。すなわち、ガリラヤのナザレに生きていたマリヤに、主の使いが臨んで、言葉を告げたのです。「あなたはみごもって、男の子を産みます。名をイエスとつけなさい。その子はいと高き方の子と呼ばれます」。しかし、マリヤは「どうしてそんなことが有り得ましょう。私はまだ男の子を知りません。」御使いは「聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。…神にとって不可能なことはありません」。マリヤは答えました。「本当に、私は主のはしためです。あなたのおことば通り、この身になりますように」。御使いの言った通り、彼女は身ごもります。胎内の子は成長していきます。

こうしたなかに、難しい立場にあったのがヨセフでした。マリヤの許婚者ですが、まだ結婚していないマリヤが身ごもったという事実を前にして、事柄を理解することができませんでした。彼はマリヤを愛していましたから、静かに離縁しようと考えていました。そのヨセフにも、御使いがやってきて、御告げをしたのです。『ダビデの子ヨセフ。恐れないうあなたに妻マリヤを迎えなさい。その胎に宿っているものは聖霊によるのです。マリヤは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方こそ、ご自分の民をその罪から救ってくださる方です。』ヨセフは眠りからさめて後、御使いが命じたように、マリヤを妻として迎え、誕生した後には、その子の名前をイエスとつけたのです。

キリスト教信仰においては、三位一体なる神を信じ、自らが罪人であることを認め、その罪の贖いはイエス・キリストの十字架と復活の福音にしかないことを認め、信じていくことが重要です。そのことをこれから行われる洗礼式においても確認します。その上で、今朝読んでいる処女降誕の出来事を受け入れ、信じていくことも大切です。聖書を読み始めた方々は、これらは単なる物語であると受け取られるかもしれませんが、これらの記事を読んでいくと、福音書の記者たちはそれらを事実として記しています。ルカとマタ

イは相談したわけではありませんが、双方ともマリヤの胎内に宿った子は、聖霊によると記しています。このことについては、私たちも真正面から受け止めていきませんと、多くの他の奇跡などの記事についても、自分の理解しやすいように組み替えて読んでいくことになってしまいます。ここにも、人間中心の思考が入り込んでしまうのです。神中心に考えていきたいのです。命の創造主である神は、救い主の誕生について、私どもの考えを越え、聖霊によって身ごもるという道筋をとられたのです。

マリヤとヨセフが御使いの御告げを受けた時に、それを信仰をもって受け止めていったように、私どもも創造主なる神を信じ、それを真正面から受け止めていく時に信仰が始まるのです。今年のクリスマスには、誰しもマリヤとヨセフとともに、主の恵みを信じているではありませんか。